

告白体の高山樗牛

木村 洋

—

自然主義文学の代表作としてよく知られている正宗白鳥「何処へ」(『早稲田文学』26、29号、一九〇八年一、四月)の主人公は、『樗牛全集』(全5巻、博文館、一九〇四年一月、一九〇六年四月)を本棚に備えている青年として登場する。この設定は、当時の読者に臨場感を与える一つの仕掛けとして機能していたはずである。現に『樗牛全集』は多くの読者を獲得しており、繰り返し高山樗牛への愛着を語った近松秋江は次のような証言を残している。「此な間も早稲田大学前のある書肆で、番頭の言ふのを聞くと、樗牛全集くらゐよく売れる本はないさうである。九月学校が開ける時期になつて学生が段々戻つてくるにつれて、樗牛全集の一冊が売れない日は一日もないさうである」(『文壇無駄話』『読売新聞』一九〇九年九月二六日)。

樗牛がこのように青年たちの景慕の対象として浮上する大きなきっかけになったのは、雑誌『太陽』にとくに一九〇一年から一九〇二年にかけて発表された評論群だった。これらは発表時に長谷川天溪や坪内逍遙など多くの論者たちの発言を呼び寄せただけではない。数年を経た日露戦争後においても島村抱月をはじめ多くの者たちが樗牛の提起した問題を論じた。抱月は「梁川、樗牛、時勢、新自我」(『早稲田文学』24号、一九〇七年一月)で「彼(樗牛、木村注)は畢竟我が邦に於けるスツールム、ウント、ドラングの驍将であつた」とも述べているが、それは必ずしも誇張ではない。文学の前線は、一九〇二年二月の樗牛の死から数年を経た日露戦争後に至るまで一貫して樗牛とともにあつたと言える。

では樗牛の評論活動の革新性はどこにあつたのか。これまで樗牛「美的生活を論ず」(『太陽』7巻9号、一九〇一年八月)

を契機とした一九〇〇年代初頭の文壇の騒々しい状況は幾度か注目されてきたが、²⁾ここでは別の光景に着目しつつ、樗牛の試みを把握することを目指している。本論の関心は、いささか唐突に聞えるかもしれないが、「一代青年の代表者」としての徳富蘇峰の地位の失墜を視野に入れつつ、樗牛の批評活動を考えることにある。樗牛が蘇峰の言動と密接に関わる形で登場したことは、複数の資料によつて裏づけられる。明治後期において樗牛の評論がいかなる文学史的意義を担ったかは、この両者の関係を視野に入れることで、いっそう鮮明に浮かび上がるはずである。

さらにこの検討は、明治中期の文学の担い手たちによつて政治と文学の関係がどのように意識されていたかを把握するための重要な作業となるだろう。周知のように自由民権運動以後の文運隆盛のなかで、政治と文学の双方に強い執着を見せる若い知識人たちが台頭し、同時に、北村透谷と山路愛山のあいだで交わされた人生相渉論争（二八九三年）に象徴的に見られるように、文学と政治の関係をいかにして再設定するかが焦眉の課題として浮上した。そして樗牛の試みは、改めてこの課題に意欲的に取り組んだ事例として現れたと考えられる。本論はこうした樗牛の歴史的意義にも言い及びたい。

二

まず樗牛の発言のなかでとくに反響を呼んだ「美的生活を論ず」に着目したい。周知のように樗牛はこの記事で「理性と道徳」を斥けつつ「本能の満足」を徹底して追求する「美的生活」を推奨する。ここで樗牛の問題意識を鮮明に表す部分として目を留めたいのは、楠木正成（楠公）と菅原道真（菅公）の扱い方である。

楠公の湊川に討死せる時、何ぞ至善の観念あらむ、何ぞ其の心事に目的と手段との別あらむ、唯君王一旦の知遇に感激して微臣百年の身を抛ちしのみ。是の如くにして死せるは公にとりて至高の満足なりし也。而して是の満足を語り得むものは倫理學説にあらざして公自らの心事ならむのみ。菅公の配居に御衣を拜せし時、何ぞ至善の観念あらむ。何ぞ君恩を感謝するを以て臣下の義務なりと思はむや。畢竟公の本心は唯是の如くにして満足せられ得べかりしのみ、拘々たる理義如何ぞ公が是の本心を説明し得べき。（中略）彼等の忠や義や、到底道学先生の窺知を許さざるものある也。喩へば鳥の鳴くが如く、水の流るゝが如けむ、心なくしておのづから其の美を濟せる也。

樗牛はここで特定の価値観を逆撫するような主張を戦

略的に組み立てていっていると考えられる。文中での楠木正成や菅原道真たちのふるまひは、通常ならば「至善の観念」「倫理学」に適う事例のはずだが、ここではそのような価値観との繋がりが否定され、個人的な「満足」を盲目的に追求した挙動として再解釈されつつ「美的生活」の実践例に組み込まれる。

この主張は後続の部分でさらに奔放な形をとる。樗牛は「美的生活」の実行者の事例として、先の楠木正成と菅原道真の他に、「金錢。其物を以て人生の目的と信じたる」守銭奴、「相擁して莞爾として」心中を遂げる男女、「食を路傍に乞」い、「故郷を追放せられ」、「帝王の怒に触れて市に腰斬せられ」てまで天職を全うしようとする詩人美術家を挙げていく。すなわち、楠木正成や菅原道真は、通例ならば決して結びつけられないはずのこうした逸脱者たちと同列に扱われるべき存在として発見されていた。ここでの楠木正成たちの扱いからも「美的生活を論ず」の挑発的な性格が分かるだろう。この論の構成から見えてくるのは、樗牛が誰を仮想敵としていたかである。それは先の引用文にもあった「道学先生」、つまり、楠木正成や菅原道真を「至善の観念」「倫理学」と結びつけつつ論じることを習慣とする者たちだった。

ではこのような構想が一九〇〇年前後の文学史的展開の

なかでいかなる意味を持つのか。ここで国木田独歩の言動を手掛かりとしたい。独歩は晩年の樗牛の発言に強い関心を寄せた人物の一人だった。そのことを確認するにあたり、当時の独歩の代表作「牛肉と馬鈴薯」（『小天地』2巻3号、一九〇一年一月）に触れておきたい。この内容は、ある醜陋した男が同席する「俗物党」たちの生き方に異議を唱えつつ自身の特異な人生観を吐露するというものであり、その点で樗牛「美的生活を論ず」との強い類縁性を感じさせる。事実、独歩はこの小説について薄田泣菫宛書簡（一九〇二年四月八日）で次のように述べている。

『牛肉と馬鈴薯』の如きも遂に小生を満足せしむるの評に接せず候。〇〇君の『小天地』に於ける評の如き、殆ど該小説の皮相だけ読まれしやに小生は感じ情けなく候。其他早稲田学報の批評の如き殆ど該小説の主眼を知らざるものと存候。今やニイツエ論あり、これに伴ふ人生論あり、小生は機会を見て該小説の主眼を論文的に又一度主張して見たく存居候。（『国木田独歩全集』5巻、学習研究社、一九六六年六月、453頁）

独歩は、「今やニイツエ論あり、これに伴ふ人生論あり」という状況に触れつつ、「牛肉と馬鈴薯」の主眼を論文で発表し直したいと述べている。結局この論文は書かれなかったが、当然ながら文中の「ニイツエ論」「これに伴ふ

人生論」は、当時大きな反響を呼んだ登張竹風「フリードリヒ、ニイチエを論ず」(『帝國文学』7巻6〜11号、一九〇一年六〜十一月)と樗牛「美的生活を論ず」が意識されていた(3)。樗牛への関心は、高山文学士の論文に就て「(『民声新報』一九〇一年一月二〜三日)で表明される樗牛への熱烈な共感、あるいは、樗牛の死去の際に書かれた「高山林次郎氏を吊す」(『山比古』9号、一九〇三年一月)での、「余近時博士の説を評論するの志あり。今や此人なし。余が評論に答ふる者、既に博士其人に非ずなりぬ」という言及からも裏づけられる。重要なのは、このように樗牛に強い関心を寄せていた独歩が「牛肉と馬鈴薯」で次のような仮想敵を設定していたことである。

僕の知人に斯う言つた人があります。吾とは何ぞや(Phot am I?)なんていふ馬鹿な問を發して自から苦ものがあるが到底知れないことは如何にしても知れるもんでない、と斯う言つて嘲笑を洩らした人があります。世間並からいふと其通りです、然し此問は必ずしも其答を求むるが為めに發した問ではない。実に此天地に於ける此我てふもの、如何にも不思議なることを痛感して自然に發したる心靈の叫である。此問其物が心靈の真面目なる声である。これを嘲るのは其心靈の麻痺を白状するのである。

作中では明示されないが、ここで主人公に「嘲笑を洩らした人」として念頭に置かれているのは徳富蘇峰である。そのことは独歩の遺稿「天地の大事実」(一八九六年八〜九月執筆)から確認される(4)。つまり「牛肉と馬鈴薯」は、青年の内面を理解しえない固陋な人物として密かに蘇峰を批判した作品であり、一方で、樗牛の発言と協調的な作品として作者に意識されていた。このことから樗牛の試みが蘇峰と対蹠的な形で浮上していたことが分かるだろう。樗牛の評論の革新性がどこにあったかを把握する作業は、このように樗牛と蘇峰が対蹠的な存在と目されたような構図を考慮しつつ行われるべきだと考えられる。

樗牛と蘇峰の関係を別の角度からも確認したい。先に見たように、樗牛「美的生活を論ず」では楠木正成の事跡に「至善の觀念」「倫理学」を見出す者たちが仮想敵とされていたが、蘇峰の言論活動はまさにこの仮想敵の姿をなぞる形で展開していた。たとえば蘇峰「日曜講壇平常の場合に於ける愛国心」(『国民新聞』一九〇〇年一月二八日)には次のような部分がある。

試みに学校の講堂に入りて見よ、楠木正成湊川の討死の如き適例は、屢々応用せられて、我が児童及少年の愛国心、若くは勤王心を鼓吹しつゝ、あり。元寇の歴史の如きも、今や愛国教育の活ける手本となりつゝ、あり。

吾人は之に対して苦情なし。但だ遺憾なるは、此れと与に日常、普通、市民的義務の遂行に関する教養の欠乏是れのみ。

こう述べた上で蘇峰は、題名のとおり「平常の場合に於ける愛国心」の重要性を説いている。むろんここで楠木正成は必ずしも無条件に肯定されていないが、「愛国教育の活ける手本」という語からも分かるように、あくまで倫理を説く文脈で重要な参照対象として位置づけられる。以上からも蘇峰と樗牛の違いは明らかだろう。先に見たように「美的生活を論ず」で楠木正成は、蘇峰とは異なり、国民の備えるべき倫理を論じる題材ではなく、盲目的に「本能」に突き動かされた「美的生活」の実行者として、守銭奴たちと同じ範疇に括られる。そしてこの視野のなかで、本来ならば楠木正成のような忠臣とはもともと程遠い守銭奴のような人物にも独自の欲求が認定され、敬意が捧げられる。樗牛が構築しようとするのは、そのように楠木正成と守銭奴のふるまいが等価の検証対象となるといふ、蘇峰の発想から生れようのない批評的見取り図なのである。独歩が樗牛に見出していたのは、そのような蘇峰との違いだったと考えられる。

しかし同時に留意しておきたいのは、改めて断わるまでもなく、かつて独歩が蘇峰を支持した無数の青年たちの一

人だったことである。そしてこのような者たちがしだいに蘇峰を迂遠な存在として見出していくという事例は、後述のように独歩に留まらない。つまり樗牛は、かつて蘇峰がいた位置に入れ替わるようにして登場したと言える。ではそこで何が起きていたのか。この両者の関係を視野に入れることで、樗牛の評論を貴重な試みとして浮上させていく歴史的文脈が見えてくるはずである。

三

徳富蘇峰と高山樗牛が明治中期の思想界において同じような地位を占めていたことは、早稲田派の評論家、中島孤島の樗牛評からも裏づけられる。

然り、一代青年の代表者として、はた其の指導者として、彼れの熱情と、彼れの才筆とハ、最も適當なるものにあらざりし乎。(中略)彼れハ実に蘇峰が會て『国民之友』に於て然りしが如く、透谷が『文学界』に於て然りしが如き意味に於て、一代青年の代表者はた指導者なりき。(癸卯文学(二種の人物))『読売新聞』一九〇三年二月一日)

同じような指摘は、近松秋江「無題録」(『早稲田文学』15号、一九〇七年三月)の次のような一節にも見られる。「文明批評家は常に一代の青年が渴仰の中心となる。福沢翁は明治

の初年に於て彼等が輿望を一身に集めたり。徳富氏は『国民の友』全盛時代に於て、高山氏は三十四五年に於て。是れ文明批評家とは青年時代ヤング・セレスティヤルの先駆なればなり」。このように蘇峰と樗牛は「一代青年の代表者」という役割において同じような存在と見做されており、この点に着目すれば、樗牛の行つたことはかつての蘇峰の「一代青年の代表者」という役割の継承と言えるだろう。しかし両者は、いかなる主張によつてこの役割を担つたかという点で大きく異なっている。つまり樗牛は、「一代青年の代表者」としての蘇峰の役割の失効が誰の目にもはつきりと顕在化する日清戦争後の思想状況を視野に入れつつ、改めて「一代青年の代表者」という役割を再構築したと考えられる。ではそれはどのように蘇峰と違うのか。

周知のように蘇峰に「一代青年の代表者」という地位をもたらししたのは、藩閥内閣の「貴族」的な政治体制の打破を唱えた平民主義という主張であり、この主張を説いた『將來之日本』(経済雜誌社、一八八六年一〇月)は大きな反響を巻き起こす。さらに蘇峰は、この構想の一環として「明治ノ青年」への煽動的な呼びかけを記した『新日本之青年』(集成社書店、一八八七年四月)を世に問い、自ら刊行した『国民之友』(一八八七年二月創刊)、『国民新聞』(一八九〇年二月創刊)で幾多の時文を発表する。これらの発言群に青年た

ちが大きな魅力を感じていたことは、「あの時分私と略ぼ同じ年頃の青年には、あの清新な詩的な蘇峰氏の時文に深い感興を呼び起された経験のあるものが恐らく少くはなからう」という近松秋江の回想(『吾が幼時の読書』『趣味』1巻6号、一九〇六年一月)からも確認される。正宗白鳥も「白鳥隨筆——蘇峰と蘆花」(『中央公論』43年7号、一九二八年七月)でほぼ同じことを指摘しつつ、蘇峰の時文集の一つ、『静思余録』(民友社、一八九三年五月)を「綴じ目のほぐれるほどに日常読耽つたものである」と回想している。

しかしその後、蘇峰は変貌する。一八九七年八月、蘇峰は内務省勅任参事官に就任し、平民主義という信条に背く「変節」(『万朝報』八面鋒欄、一八九七年九月二日)として数々の非難を呼ぶ。さらに、売り上げが落ちた『国民之友』の終刊(一八九八年八月)は、「一代青年の代表者」としての蘇峰の地位の失墜をいっそう強く印象づけた。それとともに蘇峰を支持した青年たちもしだいに蘇峰を迂遠な存在として見出し、いくことは、白鳥や秋江の発言からも分かる。付言しておく、樗牛もこの「変節」を惜んだ一人だった。蘇峰の内務省勅任参事官への就任の際に樗牛は、「あ、彼は今や藩閥政府の高等官二等となりりぬ」(『徳富蘇峰』『太陽』3巻19号、一八九七年九月、無署名)と嘆き、『国民之友』廃刊の際にも「吾人実に之を悲む也。而して殊に事是に至

りたる所以を悼惜す」(『国民の友』を惜む)『太陽』4巻18号、一八九八年九月、無署名)と述べていた。

言うまでもなく蘇峰の「変節」の大きな要因の一つは日清戦争だった。というのも、当初の仮想敵だった藩閥政府の主導した戦争こそが輝かしい勝利を生み、日本の国際的地位を一挙に向上させたからである。ここで一九〇〇年一月一日、『国民新聞』に掲載された蘇峰「述懐」(署名国民新聞記者)に触れておきたい。これは、『国民新聞』の歴史を二面にわたって回顧した長大な記事であり、そこで蘇峰は自身の「変節」を次のように説明していた。

此の戦(日清戦争、木村注)こそ、日本国民が、国民的運動を為すべき転機なりと思ふたのである。即ち是れ迄は、藩閥対非藩閥の関係なりしものが、日本対清国の関係に転変したと認めたのである。平生第二の維新を、口癖の様に唱へたが、正に此の時こそ、此の時機に到着したものと信じたのである。

引用文にあるように、蘇峰にとって日清戦争が「藩閥対非藩閥」という構図を解消する主たる契機であり、それとともに浮上したのが「日本対清国」という構図だった。この一節は、急進思想(「非藩閥」)を担うことへの関心の喪失をよく物語るだろう。そのことは当然ながら蘇峰の発言を変容させる。たとえば蘇峰「日曜講壇帝室と社会の風教」

(『国民新聞』一九〇一年五月五日)の次の一節は、この態度変更がいかなる思考形態をもたらしただかを典型的に示しているだろう。

然るに如何なる幸福ぞや、我が国民は、斯る上流社会の上に、更らに万民の仰望する 帝室あり。而して 帝室の恩沢の、政治の上に於て、国民に光被せらるゝのみならず、亦た社会風教の標準となり、国民に向て、人倫の大道を、訓化し給ふとは。吾人四千余万の国民が、昨年に於て、皇太子の御結婚を賀し奉りたる時に於ても、本年に於て、親王御降誕を祝し奉るの時に於ても、其の胸中に湧くは、第一 帝室の愈よ隆昌ならんことにあり。

引用文を特徴づけるのは、「国民」という語への執着ぶりである。この短い一節に「国民」という語が四回も出てくるが、このような言明は、先の「述懐」での、「此の戦こそ、日本国民が、国民的運動を為すべき転機なりと思ふたのである」という一節をはじめ、とくに日清戦争以後の蘇峰の発言群に無数に見出される。

一体に「国民」とは、代弁の対象とするにはあまりに多様な人々を含む単位である。この記事で蘇峰は、「其の胸中に湧くは、第一 帝室の愈よ隆昌ならんことにあり」と「四千余万の国民」の内面を代弁しようとするが、「四千余

万」の人々が同一の内面を備えているという前提があまりに非現実的なのは言うまでもない。蘇峰が何ら躊躇なく行うのは、ある虚構化、つまり、「四万余万」の膨大な人間たちを一律に「皇太子の御結婚」に感激する殊勝な人間の束として提示するという操作であり、そして「日曜講壇帝室と社会の風教」をはじめとする蘇峰の発言群が熱意を傾けるのは、このような形で構成される「四万余万の国民」という架空の像の代弁者として言葉を紡ぐことだった。

このように現実から遊離した言明が、何よりも「四万余万の国民」の内部に横たわる「貴族」と「平民」のあいだの断絶に徹底して拘ろうとしたかつての蘇峰の緊張した問題意識から大きく隔たっていることは言を俟たない。一連の経過から理解されるのは、日清戦争以後の時勢が、いかにこの「一代青年の代表者」を保守的で退屈な言論人に変貌させたかだろう。

ただここで注意したいのは、これまで見てきた蘇峰の言論活動が、「変節」を挿むとはいえ、一貫してある同一の価値観を前提としていたことである。この価値観とは、政治に携わることこそが最も価値ある知識人の役割だと考える強固な政治至上主義である。この点に限って言えば、蘇峰は「一代青年の代表者」だった頃から変化しておらず、現に「有恒の実例」（『国民新聞』一九〇〇年二月三日）で

国民新聞社の歴史を回想しつつ、「経国済世は吾人の目的也。故に止むなくして主張の爲めに営業を犠牲にしたることあれども、営業の爲めに主張を犠牲としたることなし」とこれまでの一貫性を誇示していた。ここでの政治（「経国済世」）の貴さへの揺るぎない信頼は、「誰れか詩人の本領は、経国の大業、不朽の盛事にあらざると云ふや」（無署名「文人」『国民之友』279号、一八九六年一月、のち蘇峰「文学漫筆」（民友社、一八九八年一〇月）に収録）という文学観にもよく表れている。すなわち、蘇峰にとつて文学は、あくまで「経国」という至高の目的に奉仕する限りにおいて意味を持つ営みにすぎなかった。

そして樗牛の試みは、蘇峰のこうした価値観こそを否定すべき対象として見出ししていた。そのことは先に見た「美的生活を論ず」からも明瞭である。そこでは、守銭奴や心中する男女や王を意に介さない詩人美術家という、「経国済世」から最も程遠いような者たちが称揚され、さらに、楠木正成のような忠臣さえも盲目的に自己の欲求の「満足」を追求した一種の個人主義者として再提出されていた。同様のことは、「美的生活を論ず」の末尾に置かれる、「人性本然の要求の満足せられたるところ、其処には乞食の生活にも帝王の羨むべき樂地ありて存する也」という一節にも当てはまる。樗牛によって打ち出されるのは、自己の欲望

〔「人性本然の要求」に撤した生き方を実践しえたか否かだけに価値を置こうとする視点であり、それゆえ一國の最高権力者（帝王）の權威も考慮に価する対象とはならない。それが蘇峰の自明とする「経国濟世」の絶対視からいかに自由かは言うまでもない。

そして以上のことを視野に入れるとき、「美的生活を論ず」の前後に樗牛によつて書かれた、思想界・文学界への論評と友を宛先にした告白体の記述を織り交ぜた奇妙な評論が、「美的生活を論ず」と連動する模索だったことが見えてくる。すなわち、同じくこれらの評論も、蘇峰の言論活動の前提だった政治至上主義の発想を拒絶しようとする意識と密接に結びついていたと考えられる。次にこの点を見ていこう。

四

樗牛は「美的生活を論ず」の前後に、友人の姉崎潮風に宛てた書簡という体裁を持つ三つの評論、すなわち、「姉崎潮風に与ふる書」（7巻7号文芸時評欄、一九〇一年六月）、「消息」通——（姉崎潮風に寄する書）（7巻14号文芸時評欄、一九〇一年二月）、「感慨一束——（姉崎潮風に与ふる書）（8巻11号文芸世界欄、一九〇二年九月）を『太陽』に発表する。むろんこれらの記事でも思想界・文学界の話題が論じられ

るが、ときにその本来の任務は放棄され、樗牛自身の心境の告白に注意が向かう。たとえば「消息一通」に次のような部分がある。

筆執れば人に狂なりと^マ呼ばれ、物言へば君は健かなりやと問はる。曾ては吾れに理想の天地ありしが今や無し。新になる光明を提ふれば、人は見て悪蛇の眼ぞと誠めり。吾が手は久しうしてバイロンが詩集に触れぬ。あ、くマンフレッドやサルダナバラスに再び青年の慰藉を仰がむとは吾が想ひ設けざる所なりき。君よ、憐れと見給はずや。吾れは又ニイチエの思想に先天の契合あるを覚えぬるは如何にぞや。人は吾れに向て言へり、汝は先に日本主義を唱へたるに非ずや、文学美術をさへ国家的歴史的の立場より論評せむと企てしに非ずや、今や則ち如何の状ぞと。哀しい哉吾れは答ふべき言葉を知らず、唯自ら省みて、心のまゝにして自ら欺かざりしを喜ぶのみ。天も照覧あれ、遠きに在ます君の我身近くにありても見そなはせ、良しや世を挙げて偽と罵らむも吾れに於て引くべき一分の責あるを覚えぬ。所詮は矛盾の人身を受けて此の末法の世に人となりぬ。（中略）あ、多くは言はじ、君よ這般の煩悶を如何とか見給ふぞ。見上ぐれば窓前の山樹一分の紅を染めぬ、春秋席あり、日月昼夜を度る。人心何ぞ

独り是の如く常なきや。なか／＼に申すも愚かの限と存じ候。

文中で樗牛の注意は思想界・文学界から離れ、記事を書く自己に向けられる。樗牛がここで強調するのは、政治への関心の喪失である。樗牛は、「久しうしてバイロンが詩集に触れぬ」と詩（文学表現）への愛着の復活を綴る一方、周囲から「汝は先に日本主義を唱へたるに非ずや、文学美術をさへ国家的歴史的の立場より論評せむと企てしに非ずや」と難じられる状況を述べている。

周知のように樗牛は、木村鷹太郎や井上哲次郎とともに排外的な民族主義の性格を強く帯びた日本主義の主張者として一八九七年から一九〇〇年頃にかけて活躍し、自ら述べるように「文学美術をさへ国家的歴史的の立場より論評」した人物だった。そしてこの記事は、そのような硬派の言論人が、現在では「バイロンが詩集」に慰藉を求め、自ら「矛盾の人」と呼ぶような内向的人間へと変貌したことを告げる。樗牛がここで公然と行うのは、政治的人間だった自己の否定であり、文学（バイロンが詩集）こそを政治の上位に置くような価値観を獲得し直した人間として自己を再提出することなのである。そして文中の「見上ぐれば窓前の山樹一分の紅を染めぬ」云々という美文調の表現は、このような自己の変化を効果的に印象づけている。

この主張は、当然ながら、友への書簡という形式と密接に結びついている。先の引用文に「君よ這般の煩悶を如何とか見給ふぞ」とあつたように、樗牛によって重視されるのは、「君」という二人称で呼びかけ、相互の内面の緊密な連携を図っていくような、私的で排他的な連帯を志向する表現なのである。そもそもこのように評者自身の悩みを描く沈痛な告白体の記述が、本来ならば文学界・思想界の論説を記すべき「文芸時評」欄に掲載されることは異様な印象を与えるだろう。樗牛自身がそのことに自覚的だったことは、記事の冒頭に、「この書は素私信なれども聊か思ふ旨ありて茲に掲ぐ。中に公刊の文字としては相応はしからぬ所あり読者の寛恕を希ふ」とあることから分かる。この記述に見られるのは、「文学美術をさへ国家的歴史的の立場より論評」するような硬派の記事よりも、本来ならば不特定多数の公開にそぐわないような私的で文学的な表現こそを重視していこうとする姿勢だろう。

「消息一通」での政治的世界への関心の放棄および私的で文学的な言葉の擁護という姿勢が、前節で見た、守銭奴や心中する男女や盲目的に天職を全うする詩人美術家という、ことさらに脱政治的な存在を称揚しようとする「美的生活を論ず」の内容と密接に関わっていることは言を俟たない。樗牛によって重視されるのは、このように決して「経

「国済世」に第一義的な価値を置かないような表現や行動原理なのである。そして樗牛は、こうした主張を展開する傍らで、次のように「青年文学者」への扇動的な呼びかけを記していた。

然れども予は初めより今の多くの作家を以て予の言に警醒せられ得べきものと思はざりき、而かも能はざるを知りて尚ほこの侃諤を敢てせしものは、後に来るべき多望なる青年文学者の為に聊か先鞭の戒を遺さむが為なりき。足下よ、去るものをして速に去らしめよ、新教育と新文明と新理想の間に保育せられたる青年文学者の場の上に非れば、文壇の事殆ど絶望のみ。(姉崎潮風に与ふる書「前掲」)

このように樗牛は「青年文学者」への排他的な呼びかけを記し、同志たちの結束の強化を図っていた。こうした姿勢を考慮するとき、たとえ随所に沈痛で内向的な言葉が見られたとしても、単純に樗牛の晩年の評論群を闘争の断念という形で片づけることはできないだろう。すなわち、樗牛の書き記す言葉は、徳富蘇峰のような論者と異なり、「皇太子の御結婚」に高揚する「四十余万の国民」という連帯のあり方ではなく、むしろこの連帯を分断していくような、「青年文学者」たちから成る局所的で周縁的な連帯を確保していかうと目論む不遜な言説だった。言い換えれば、そ

こで行われるのは、「国民」という粗大な語をもって人々の経験を一括して意味づけることを自明とする、徳富蘇峰をはじめとした知識人たちの価値体系への侮蔑であり、こうした者たちとの敵対関係の構築なのである。

そのことを考慮するとき、樗牛の試みは決して闘争の断念なのではなく、むしろ新しい形の闘争として浮かび上がるだろう。実際、「美的生活を論ず」での幾多の挑発的な言辞の他に、樗牛は「消息一通」で「良しや世を挙げて偽と罵らむも吾れに於て引くべき一分の責あるを覚えず」と述べていたし、「姉崎潮風に与ふる書」では批評における「主観」の重要性を訴えつつ「多数主義、人気取主義」を批判していたように、随所で闘争的な姿勢を鮮明にしている。

別の角度から言えば、樗牛の試みの意義は、公と私をめぐる従来の見方を大胆に相対化するような視野を提供したことにある。先述のように晩年の樗牛は政治的世界との繋がりを拒絶した私的な言葉を好んで書き付けたが、重要なのは、この私的な言葉の地位が特異な形で規定されることである。すなわち、先に「消息一通」で強調されていたように、樗牛にとってこの私的な言葉とは、政治を語る言葉に比して意義深いものとして選び取られたものであり、政治は二次的な営みとして扱われるにすぎず、従来の思想動向において疑いなき前提となっていた公(政治)と私(文

学)の序列関係は意図的に無視される。言い換えれば、樗牛によって示されるのは、極東問題や大和民族の膨張といった当時の政治的世界の出来事を顧慮に備しないものとして貶めるような意思表明さえもが知的な検証対象として手厚くもてなされるという、従来よりもいっそう開放的な言論空間のあり方なのである。

このような視点が蘇峰の自明とする政治至上主義の発想から生れようのないことは言を俟たない。そして当時の青年たちはこうした樗牛の発言に大きな魅力を感じていた。そのことは、たとえば青年投稿雑誌『文庫』に掲載された無署名「論評」(20巻5号、一九〇二年七月)によって裏づけられる。この記事は、樗牛の晩年の文章について、「情炎えて声慄へる、希有なる詩人の出現」云々と賞賛を送り、一方で、先述の「日曜講壇 帝室と社会の風教」を収録した蘇峰『第二日曜講壇』(民友社、一九〇二年六月)を次のように評していた。

蘇峰の『第二日曜講壇』出でぬ。(中略)しかも要する所、一篇悉く常識より来り、諄々たる郷先生の言、宛として故福沢先生を憶ひ起さずはあらず、しかもたゞ平易たゞ婉転、絶えて樗牛の多恨なく、嶺雲の奇峭なき所、つひに血湧ける青年をして、巻を了ふるに堪えしむる能はじ。

このように樗牛と蘇峰を対照的な存在として位置づけるような見方が強固になっていったことは、先述の国木田独歩の発言からも明らかである。こうした状況からも、晩年の樗牛の批評活動がいかなる歴史的文脈のなかで意義を持つたかが分かるだろう。先に見たとおり、日清戦争後の思想状況において浮上していたのは、「一代青年の代表者」としての蘇峰の地位の失墜であり、それと連鎖するように現れたのが樗牛の批評活動だった。そこで示されたのは、一連の蘇峰の言動を深く条件づけていた政治至上主義的な価値体系を放棄しつつ生起するような表現や行動原理であり、そのなかで、「経国済世」を些末なものとして貶めるような意思表明さえも意義深い考察対象として位置づけていく視野が提出された。そして当時の青年たちはこうした樗牛の発言群に強い魅力を感じ、樗牛を「一代青年の代表者」として意識し始める。樗牛の評論の文学史的意義は、このように「一代青年の代表者」という役割を再構築し、改めて新旧思想の対立を設定したことにあつたと言える。

五

むろんかつての「一代青年の代表者」にとつて樗牛の発言は理解を超えていた。のちに徳富蘇峰は、ある煩悶する青年に宛てた記事のなかで青年層の樗牛熱を次のように罵

倒している。

小生の所見を、忌憚なく申せば、美的生活とは、豚的生活に候。豚が汚泥の中に、涵集する生活の情態に候。即ち美的生活とは、醜的生活の事に候。国家の事を、馬鹿にしたる話は、今更ら珍らしからず候。竹林の七賢人杯と申す連中は、千六百年前、既に二十世紀青年の理想を、実行致し候。固より此れが為めに、晋は五胡に蹂躪せられ候。(日曜講壇地方の青年に答ふる書「国民新聞」一九〇六年二月一日〜三月一日)

決して政治の価値を疑わなかつた蘇峰から見れば、樗牛の評論が単に「国家の事を、馬鹿にしたる」妄言と映ったことは無理もない。しかし先に見たとおり、そのような政治至上主義的な価値観に倦怠を覚えた分子が少からずいたことも確かである。そして当時の文学の前線は樗牛とその支持者たちの側に立つ形で新しい展開を生み出していく。とくに樗牛との関連において重要なのは、友を宛先しつつ自身の内面を開示する告白体の表現や苛烈な「道学先生」批判において樗牛の継承者と言うべき役割を担った綱島梁川、さらに、この試みと共闘しつつ生起する自然主義運動である。その指導的批評家だった島村抱月は、「梁川、樗牛、時勢、新自我」(前掲)で樗牛と梁川の延長上に自然主義運動を位置づけていたが、「自然主義の価値」(早稲田文学

30号、一九〇八年五月)では樗牛とも通底する次のような文学観を表明している。

文芸は性として半途半熟を許さぬ、常に全力的でなくては大なるものは出ない。斯う考へて見ると多数の後れたものと少数の進んだものと、即ち社会道徳と文芸との衝突は、万人悉く同程度の知識感情に達した黄金時代の外、永久に断絶すべからざるものである。

ここで述べられる「少数」派の連帯が、樗牛における友および「青年文学者」という局所的な宛先の特権化と軌を一にすることは言を俟たない。すなわち、自然主義運動によつて企てられたのは、従来の言論動向を強く規定していた政治至上主義的な価値観に浸蝕されない形での思想的連帯という、樗牛によつて提示された青写真を、新世代の「青年文学者」たち(樗牛「姉崎潮風に与ふる書」)を呼び込みつつ具体化してみるという大掛かりな実験だったと言えるだろう。自然主義運動の隆盛期に抱月は繰り返し樗牛への敬意の念を語っているが、それはこのような樗牛との思想上の紐帯のためなのである。

むろん晩年の樗牛の評論が政治への態度のとり方に拘泥したことを踏まえれば、樗牛は、文学の擁護者という顔を持っていたとはいえ、晩年に至るまでなおも政治的人間であることをやめなかつたとも言える。樗牛の模索を成り立

たせていたのは、このように政治と文学、「国家的歴史的立場」と「バイロンの詩集」をともに切実な関心の対象として引き受けていこうとする問題意識であり、だからこそ橋牛は「矛盾の人」（「消息一通」）として言論活動に携わらざるをえなかった。しかしまさにこうした政治と文学への強い執着が共存するような視野ゆえに、明治期の知識層を深く規定していた政治至上主義を大胆に相対化しつつ文学の役割を構想する批評的見取り図が胚胎しえたと考えられる。

別の角度から言えば、橋牛が行おうとしたことは北村透谷の模索を発展させることだったと言える。透谷と橋牛はともに政治と文学への強い執着を見せつつ、政治の上位に文学を置くような批評的見取り図を構想し、さらに、徳富蘇峰（民友社）の言論活動と対立的な路線を選び取ったという共通点を持っている。しかし透谷が西行や芭蕉の漂泊の身振りこそを模範として考えていたとき（「人生に相渉るとは何の謂ぞ」『文学界』2号、一八九三年二月）、橋牛は、「帝王の怒に触れて市に腰斬せられ」る詩人美術家を称え（「美的生活を論ず」）、あるいは「青年文学者」への煽動を書き付けたように（「姉崎潮風に与ふる書」）、漂泊よりも闘争を志向する形で、つまり、あくまである社会的運動として文学を位置づけていた。橋牛が透谷以上に広範な反響を呼び、

次々と新しい試みを牽引しえた要因の一端はそのあたりに求められるだろう。そしてこのような模索を通過することで以後の文学の担い手たちは、「経国済世は吾人の目的也」（蘇峰）という政治至上主義的な価値観に対して敵対的であることを辞さない、より開放的な表現と思考の拠点として文学を見出していくことになる。

注

- (1) 以下に詳しい。林原純生「美的生活論、自然主義、私小説」（『日本文学』27巻6号、一九七八年六月）、同「純粹自然主義の最後」の意味するもの」（田中実ほか編『新しい作品論』へ）、「新しい教材論へ—評論編」4、右文書院、二〇〇三年二月）。
- (2) 笹淵友一「浪漫主義文学の誕生」（明治書院、一九五八年一月）198～210頁等。ただ本論はこうした一九〇〇年代初頭の光景だけではなく、一八九〇年代の思想動向との関係を視野に入れ、より長期的な視野から橋牛の試みを把握することに努めたい。
- (3) 「美的生活を論ず」がニーチェの主張と通底すると考えられたことは登張竹風「美的生活論とニイチエ」（『帝國文学』7巻9号、一九〇一年九月一日、無署名）等から明らかである。なおこの記事が竹風の手になることは竹風「解嘲」（同誌7巻10号、一九〇一年一〇月、無署名）から分かる。
- (4) 『日本近代文学大系10』（角川書店、一九七〇年六月）の注釈（山田博光）による（453頁）。

(5) むろんここで樗牛の評論が蘇峰への直接的な批判を展開していたと言いたいのではない。樗牛が視野に入れていたのは、蘇峰をも含めた、当時の教条的な美徳の鼓吹者たちだったと考えられる。ただ重要なのは、樗牛の読者たちがそこに蘇峰と対立する主張を読み取ったことであり、本論はこの意味を考察する。付言しておく、菅原道真に関しては菅公一千年祭の挙行（一九〇二年）が近づきつつあったなかで菅原道真顕彰の動きが盛んになっており、井上哲次郎『菅公小伝』（富山房、一九〇〇年七月）、大隈重信『菅公談』（東京専門学校出版部、一九〇〇年一〇月、樗牛の跋も収録）等の史論が相次いで刊行された。のちに蘇峰も「菅公一千年祭は、種々の点に於て、我が国民を益することと存候」と菅原道真顕彰の意義を説いている（「東京だより」『国民新聞』一九〇二年三月二一日、署名門外漢）。樗牛自身も『菅公伝』（同文館、一九〇〇年四月）を刊行し、菅原道真顕彰に努めた一人だった。ただこの著書は、菅原道真とバーンズ、バイロンなどの西洋詩人との類似を指摘し、「天才を以て狂したる幾多の芸術家」（59頁）の一事例として位置づける点で、単純に井上哲次郎たちの史論と一括りにできない側面を持っている。

(6) すでに筆者は蘇峰と独歩の関係について「経世と詩人論」〔国語と国文学〕85巻10号、二〇〇八年一〇月）等で論じたことがある。

(7) この点について内田魯庵は次のように回想している。「天下の青年は翕然として其風を仰ぎ、徳富君ならずば此腐敗せる社会、此迷へる青年を奈何せんとまで渴仰してゐた。高

山君や網島君が青年の崇拜を買つたと云つても当時の徳富君の声望には到底及びもつかぬ。故長谷川二葉亭の如き彼岸の人でさへ徳富君には傾倒してゐた」（二十年前の国民新聞及其当時の文壇）〔国民新聞〕一九一〇年二月二一日）。ここでの「声望」の規模の違いは、蘇峰が文学方面だけでなく、政治方面でも活躍した点によるだろう。

(8) 正宗白鳥は「僕の今昔」（『読売新聞』一九〇六年一月四日）で「この人も空想の夢から醒めて、現実的利益に赴くやうになつた」と蘇峰への失望を語っており、後述の蘇峰「日曜講壇地方の青年に答ふる書」を次のように批判していた。「氏（蘇峰、木村注）に書を贈つた代表的青年とハ根本に頭脳を異にし、氏自身にハ青年時代から専ら「治国平天下」を心がけて、氏の所謂「愚なる煩悶」をしたことがないのだから、氏の言ハ其青年の渴仰を価する説でハなかつた」（『宗教問題』『読売新聞』一九〇六年五月一〜二日）。白鳥はこのように蘇峰批判を記す一方で、「華嚴の滝辞世の文も美的生活論の如きさへ平板道徳に盲従し得ざる青年悲痛の声にして、汚沢の止水を甘しとする者の伺ひ知る所にあらず」（『青年と宗教』『読売新聞』一九〇五年二月一三日）と樗牛の主張の意義を語っていた。近松秋江は「故高山樗牛に対する吾が初恋」（『中央公論』22年5号、一九〇七年五月）で次のように述べている。「恰も高山樗牛が盛に時世論（其の主義よりも其の方式其の方式よりも其の感操が面白い）を遺だした頃から民友社は青年の心を失つた。私は『明治の小説』に依つて高山にホレそめ、それと同時に民友社に飽きが来た」。こ

のように秋江は関心の変化を語るが、同時にこう述べていた。「民友社はそが仕立てた……いや橋渡しをした時勢の中からピヨコリと高山樗牛を生んだ。高山樗牛を作つたのは高山樗牛自身である。併しながら彼れをして彼れを作らしめた時勢を開拓した有力者は井上哲次郎博士ではない、民友社であつた」。このように蘇峰（民友社）の影響力は甚大であり、蘇峰がいかなる時勢を開拓したかという問題は、今後改めて考察を要するだろう。

- (9) 樗牛はしばしば無署名の記事を『太陽』に発表している。これらの記事に言及する際、本論は『樗牛全集』（前掲）『増補縮刷樗牛全集』（全6巻、博文館、一九一四年六月）一九一六年九月）に収録されたものを樗牛の記事と判断した。
- (10) この記事が蘇峰によって書かれたことは蘇峰「国民新聞巻万号」（『国民新聞』一九一九年二月六〜八日）で述べられている。

- (11) 樗牛自身も同じ時期の蘇峰の発言を次のように消極的に評している。「総じて蘇峰君の意見は何処までも英吉利風の常識主義で、奇矯とか卓抜とか評さるべき文字は少しも無いが、一般読者にとりては安全なる社会的批評と云ふべきであらう。日曜講壇なども一寸思ひ付きの好い所はあるが、圏点沢山の割合には平板無味の文字が多い」（『雑談』『太陽』8巻14号、一九〇二年一月）。

- (12) 綱島梁川と自然主義運動の関連について拙論「明治後期文壇における『告白』（『日本近代文学』81集、二〇〇九年一月）を参照されたい。

- (13) 透谷と樗牛の試みの類似性は、先の中島孤島「癸卯文学（二種の人物）」の記述からも明らかだろう。孤島は「癸卯文学（センチメンタリズム）」（『読売新聞』一九〇三年六月一日）でもこう記している。「彼等（透谷と樗牛、木村注）の思想ハ誠に世の健全なるものを距ること遠し、されど彼等が情熱の声ハ、よく世の人の胸より胸に、夫の生命の響を伝ふるものなしとする乎」。付言しておく、正宗白鳥「何処へ」（前掲）の主人公が本棚に『樗牛全集』とともに所有しているのが『透谷全集』（文武堂発売、博文館発売、一九〇二年一月）だった（26号23頁）。

- (14) かつて樗牛は民友社についてこう述べていた。「吾等の見る所にては民友社の文学は遂に功利的たるを免れず、彼等は社会人道に裨益する所ある限に於て文学の価値と意義を容すものあり、彼等は文学の独立を認めざるなり、（中略）是の如きは果して真に文学を解するものと謂ふべき乎、はた其忠実なる伴侶と称するを得べきもの乎、吾等は甚だ惑ふ」（『新聞紙の文学に就きて』『太陽』2巻2号、一八九六年一月、無署名）。この言明からも透谷の民友社批判との共通性が確認されるだろう。

付記 引用の際、原則として旧字を新字に改め、副題、圏点などの記号やルビを適宜省略した。「と」を「こと」とした。なお本論は二〇一一年度熊本国語国文学会での発表（二〇一一年一月一七日、於尚綱大学）に基づいている。貴重なご意見を下さった方々に感謝申し上げます。